

ブラジルポルトガル語の日本語起源借用語における混交形

谷口 ナタリア愛香

1. はじめに

ブラジルでは 1970 年代から、武道や和食のような伝統的日本文化、更に漫画やアニメなどの人気により、多くの日本語起源借用語（以下、JOL）が使われるようになった。JOL に関して、ロング・高城（2019）はマーシャル語における JOL の意味と発音の変化に注目した研究を行った¹。また、ロング・今村（2020）では、ヤップ語における JOL の音韻的特徴と意味変化の詳細を分析した。一方、ブラジルポルトガル語における JOL に関して、Richter&Agostinho（2017）は、ポルトガル語における JOL をコーパスから取り上げて音声音韻的に分析と形態的適応の研究を行った。また、谷口（2020）では、ブラジルにおける 200 以上の JOL の抽出を行い、意味変化と使用実態について考察を行った。その結果、JOL の中には日本語要素とポルトガル語要素の組み合わせである混交形という形もみられることを明らかにしている。

しかし、現在、使用されているこの混交形という JOL の形成についての研究はこれまで行われていない。そこで、本稿では、ブラジル JOL における日本語要素とポルトガル語要素の組み合わせである混交形を取り上げ、分類と分析を行う。そして、それらの特徴を明らかにする。

2. 混交形

混交形とは、ある言語要素と他言語要素との組み合わせである。本稿の混交形の語順に関して、ポルトガル語の場合はヘッド²と修飾語³である。日本語の場合は、逆に修飾語とヘッドの順番である。つまり、以下の例は全てヘッド+修飾語のポルトガル語の語順である。例えば、“dança kabuki”は歌舞伎の一種ではなく、ダンスの一種である。また、“toalha tenugui”は、タオルの一種で、手ぬぐいというタオルの種類のことを指す。本稿では、ポルトガル語と JOL を組み合わせた混交形を以下の 9 つを例に挙げて分析を行う。本稿で取り上げるポルトガル語の混交形の形式は、全て上位語(hyperonym、文献によって hypemym でもある)・下位語(hyponym)という関係である(Murphy&Koskela, 2015)。

しかし、ポルトガル語要素と日本語要素の意味範疇の重なりや違いなどによって、重言、包含関係、異範疇という 3 つに分類ができる。以下の 9 つの複合語について分類と分析を行う。選定理由は、①ポルトガル語要素と日本語要素の組み合わせであること、②日本人は使用していない複合語であること、この 2 点である。これらは、

¹ JOL とは“Japanese Origin Loanword”の頭文字である。

² ヘッド (head) とは主要部のことである。

³ 修飾語とは他の語を修飾する、つまり説明するために付け加える語である。

Carr(1972)とロング・今村(2020)を基にして、それらを「重言型混交形」、「包含型混交形」、「異範疇型混交形」のカテゴリーで著者が本稿で用いる。

“molho tarê”(味付けたれ); “feijão azuki”(小豆まめ); “carne wagyu”(和牛肉); “ganguê yakuzã”(ヤクザギャング); “dança kabuki”(歌舞伎ダンス); “toalha tenugui”(手ぬぐいタオル); “boneca kokeshi”(こけし人形); “tempero furikake”(調味料ふりかけ); “cama tatame”(畳ベッド);

3. 重言型混交形

重言(redundancy)型とは、同じ意味を持つ異なる2言語の要素が重なった複合語である。例えば、日本語でチゲ鍋という言葉がある。チゲは韓国語で「鍋」の意味なので、直訳すると「なべなべ」である。また「アイヌ人」の「アイヌ」はアイヌ語で「^{ひと}」の意味なので、直訳すると「ひとひと」となる。

このような複合語はポルトガル語におけるJOLにも見られる。ポルトガル語における重言型混交形は同じ意味を持つ、ポルトガル語要素と日本語要素が重なった複合語である。次の3.1でポルトガル語における重言型混交形である“molho tarê”(たれたれ・たれソース)について分析を行う。

3.1. 【molho tarê】(たれたれ・たれソース)

表1のように、日本語の「たれ」と「ソース」はポルトガル語ではどちらも“molho”で表される。例えば「トマトソース」は“molho de tomate”、“バーベキューソース”は“molho barbecue”となる。また、「焼きそばソース」と「焼きそばのたれ」はどちらも“molho de yakissoba”となる。

表1 ポルトガル語と比較する日本語の“molho”の翻訳

ポルトガル語	日本語
<u>molho</u> de tomate	トマトソース
<u>molho</u> barbecue	バーベキューソース
<u>molho</u> para guioza	餃子のたれ
<u>molho</u> yakiniku	焼肉ソース・焼肉のたれ
<u>molho</u> teriyaki	照り焼きソース・照り焼きのたれ
<u>molho</u> de yakissoba	焼きそばソース・焼きそばのたれ

ブラジルで見られる“molho tarê” [ˈmoʎu taˈrɐ] (図1)の意味は「味付けたれ」である。個別に見るとポルトガル要素の“molho”が「たれ」で、日本語要素の“tarê”も「たれ」である。したがって、日本語に訳すと「たれたれ」となる。



図1 “molho tarê”⁴

3.2. 重言型混交形の結果

このようなことが起こる原因について図2と3を用いて説明すると、ポルトガル語には上位語として“tempero”（調味料）があり、その下位語として“molho”（たれ、ソース）、さらにその下位語として“molho tarê”（たれたれ・たれソース）がある。この、“molho”は付ける液体、かける液体のどちらも意味も含んでいる。“molho tarê”は「たれたれ」あるいは「たれソース」としての独立要素ではなく、日本語要素を維持して商品名“tarê”（たれ）として広くブラジルで定着している。現在のところ、同じ意味が重なった複合語である重言型混交形は“molho tarê”「たれたれ」または「たれソース」の1つだけであった。

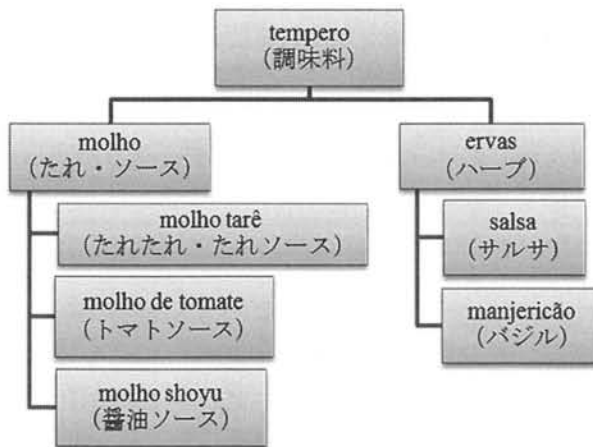


図2 “molho tarê”（ブラジル）

⁴ “Molho Tare 500ml Maruiti” Tanaka Nippon House <https://www.tnh.com.br/molho-tare-500ml/2327>
 閲覧 2022 年 02 月 03 日

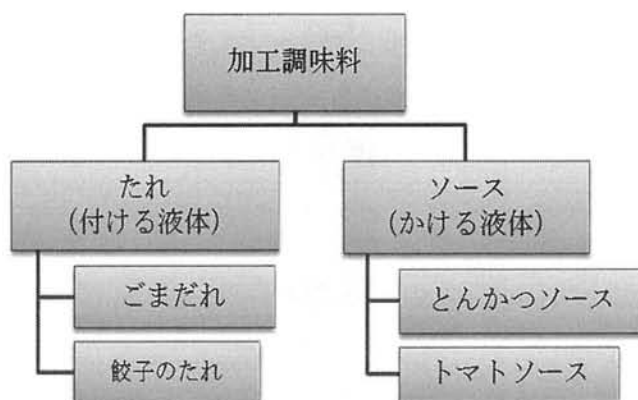


図3 「味付け」と「たれ」(日本)

4. 包含型混交形

包含(inclusion)型とは、1つの言語の意味範疇に他方の言語の意味範疇が含まれている複合語である。例えば、日本語の「クーポン券」の「クーポン」(coupon)はフランス語で「割引券」の意味である。「クーポン」の中に「券」の意味が含まれているので直訳すると「割引券券」である。このように「券」は上位語であり、「クーポン」はそれに含まれる下位語なので包含型混交形といえる。「入場券」は入場するための券、「乗車券」は乗車するための券なので上位語、下位語の関係ではない。

先述した通り、ポルトガル語の語順はヘッド+修飾語なので、ヘッドとなるポルトガル語要素が上位語であり、修飾語となる日本語要素が下位語となる。ポルトガル語におけるJOLでは、ポルトガル語要素に日本語要素が含まれている複合語が包含型混交形である。

本節ではポルトガル語におけるJOLの包含型混交形として“feijão azuki”(小豆まめ)、“carne wagyu”(和牛肉)、“gangue yakuza”(ヤクザギャング)についての分析を行う。

4.1. 【feijão azuki】(小豆まめ)

ポルトガル語の“feijão azuki” [fei'ʒẽw a'zuki] という複合語の意味は「小豆のまめ」である。個別にみると、ポルトガル語要素の“feijão”が「豆」、日本語要素の“azuki”が「小豆」である。日本語に訳すと「小豆まめ」となる。“azuki”は豆類の一種であるため、ポルトガル語要素の“feijão”が上位語で、日本語要素の“azuki”が下位語となる。言い換えると、“feijão”に“azuki”が含まれる(図4)。一方で、“feijão azuki”は「あずき(豆の一種) + まめ(豆)」となっているので、日本語母語話者に「小豆まめ」は不自然に感じられるかもしれない(図5)。

こうした意味の上下関係の違いによって、ポルトガル語においては“feijão azuki”という複合語になる。



図4 “feijão azuki” (ブラジル)



図5 「小豆」と「豆」(日本)

4.2. 【carne wagyu】 (和牛肉)

ポルトガル語の“carne wagyu” [ˈkafɨni uaˈɡju] または [ˈkafɨni uagiˈũ] という複合語の意味は「高級な牛肉」である。個別に見るとポルトガル語要素の“carne”が「肉」、日本語要素の“wagyu”が「和牛」である。“carne wagyu”を日本語に直訳すれば「和牛肉」となる。つまり、ポルトガル語要素の“carne” (肉) が上位語で、日本語要素の“wagyu” (和牛) という下位語からなる複合語である (図6)。

日本語でも「和牛」は「牛肉」の下位語である。ただ、日本で「和牛」とは日本産 (国産) の牛肉を意味している (図7)。日本語でも「和牛」は「牛肉」の下位語である。日本では一般的に国産牛肉を「和牛」と呼ぶが「和牛肉」でも日本人はそれほど違和感ないだろう。一方、ブラジルでは“carne wagyu”以外に“picanha”、“costela premium”、“bife de chorizo”、“shouder steak”という高級肉もあるが、“wagyu”に日本産の意味は含まれておらず、質が良く値段が高い牛肉の1つである。

このようにブラジルの“carne wagyu”「高級な牛肉」と日本の「和牛」ではその意味範疇が異なっているのである。

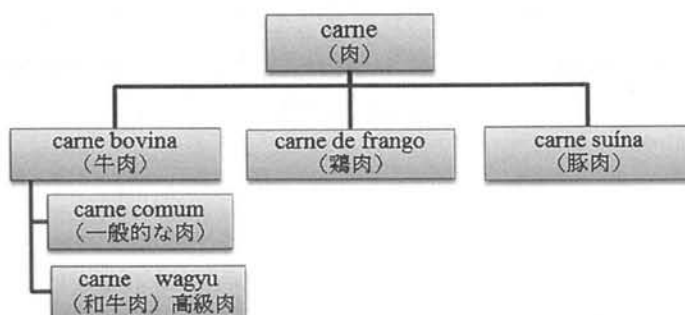
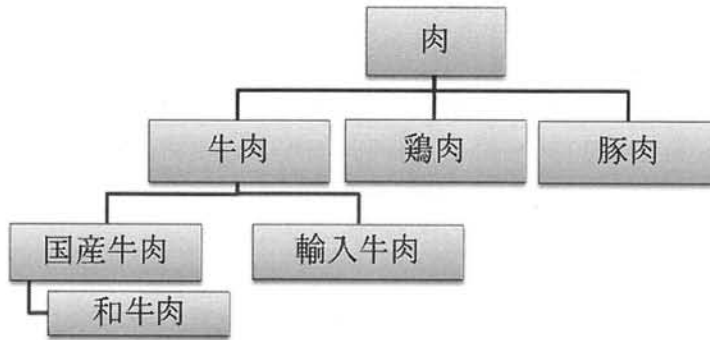


図6 “carne wagyu” (ブラジル)



5

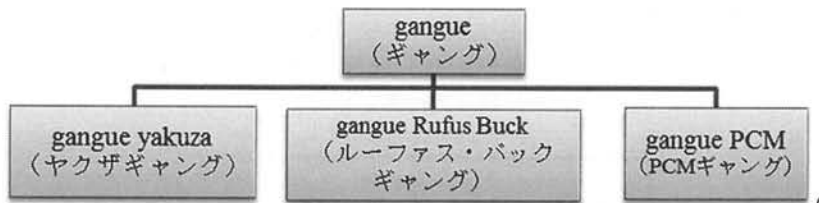
図7 「和牛」と「肉」(日本)

4.3. 【ganguê yakuza】(ヤクザギャング)

ポルトガル語の“ganguê yakuza” [ˈgẽ̃ŋgɐ jaˈkuzɐ] という複合語の意味は「ヤクザ」である。つまり、個別に見てみるとポルトガル語要素の“ganguê”が「ギャング」で、日本語要素の“yakuza”が「ヤクザ」である。したがって、“ganguê yakuza”を日本語に直訳すれば「ヤクザギャング」である。

この複合語はポルトガル語要素の“ganguê” (ギャング) という上位語と日本語要素の“yakuza” (ヤクザ) という下位語からなる (図8)。一方、日本語で「ヤクザ」とは「組織集団」の下位語である (図9)。「ヤクザ」が「ギャング」の下位語ではないため、日本語に訳した「ヤクザギャング」は不自然に感じられる。

なお、ブラジルでは“yakuza”は“ganguê”であり“máfia”でもある。ブラジルで“yakuza”を説明する時には、“máfia japonesa” (日本のマフィア) とも言われる。日本語母語話者によると、「ギャング」は「暴力集団」のイメージがあり、「ヤクザ」が「ギャング」の一種という考え方は理解できるという。ただし、「ヤクザ」が「マフィア」の一種という考え方は理解しにくいようである。こうした違いがなぜ生じているのかについては今後の課題としたい。



6

図8 “ganguê yakuza” (ブラジル)

⁵農林水産省による「牛(肉)の区分について」を参考にして筆者が作成 https://www.maff.go.jp/j/study/syoku_niku/02/pdf/data3.pdf 閲覧 2022年5月21日

⁶“ganguê PCM”とは、“Primeiro Comando de Massachusets”いわゆるマサチューセッツ州に初めて登場したブラジル出身のギャングである。

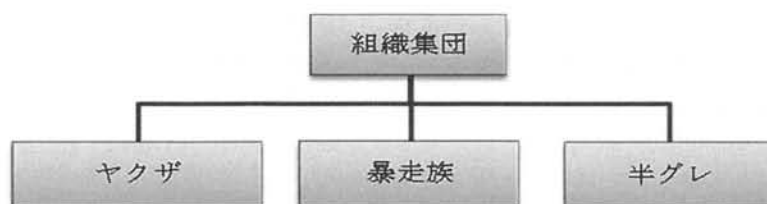


図9 「ヤクザ」と「ギャング」(日本)

4.4. 包含型混交形の結果

ポルトガル語要素に日本語要素が含まれている複合語である包含型混交形は、“feijão azuki”「小豆まめ」、「carne wagyu」 「和牛肉」、「gangue yakuza」 「ヤクザギャング」の3つであった。ポルトガル語要素が上位語となる理由は、ポルトガル語話者である聞き手に対して日本語要素である「小豆」「和牛」「ヤクザ」の説明、または対象物について言及する際に、日本語要素にポルトガル語要素をプラスして複合語にした方が、より効果的に伝えられるからだとして唆される。例を挙げると、日本語に慣れていない人に“azuki”、“wagyu”、“yakuza”と言うと、何の何かを理解するまでに少し時間がかかる場合がある。しかし、“feijão azuki”、“carne wagyu”、“gangue yakuza”とポルトガル語を組み合わせると日本語に不慣れたブラジル人にとっては、より直接的でわかりやすいのである。このような経緯から包含型混交形の JOL が発展したと考えられる。

5. 異範疇型混交形

次に、異範疇型混交形について検討する。異範疇型混交形とは、1つの言語の意味範疇と他方の言語の意味範疇が異なっている複合語である。つまり、ポルトガル語における JOL ではポルトガル語要素の意味範疇と日本語要素の意味範疇が異なっているということである。

本節ではポルトガル語における JOL の異範疇型混交形として“dança kabuki” (歌舞伎ダンス)、“toalha tenugui” (手ぬぐいタオル)、“boneca kokeshi” (こけし人形)、“tempero furikake” (調味料ふりかけ)、“cama tatame” (畳ベッド) を取り上げて分析を行う。

5.1. 【dança kabuki】 (歌舞伎ダンス)

ポルトガル語の“dança kabuki” [ˈdansa kaˈbuki] という複合語の意味は「歌舞伎のようなダンス」である。つまり、ダンスの一種と考えられている。個別に見ると、ポルトガル語要素の“dança”が「ダンス」で、日本語要素の“kabuki”が「歌舞伎」である。日本語に訳すと「歌舞伎ダンス」となる。

ポルトガル語では“kabuki”という名のダンスの一種を指すが、日本語では、「歌舞伎」と「ダンス」は意味範疇が異なるので、“dança kabuki”を異範疇型混交形に分類した。“feijão azuki”「小豆まめ」などと同様に、日本語母語話者にとって「歌舞伎ダンス」

は不自然に感じるだろう。なぜなら日本語で「歌舞伎」とは「舞台芸術」の一種であり、「ダンス」とは意味範疇が異なるからである(図11)。一方で、ポルトガル語では、“kabuki”は“dança”の下位語と考えられている(図10)。こうした意味の上下関係や対立(contrast)関係の違いによって、ポルトガル語においては“dança kabuki”という複合語になったと考えられる。このような意味関係の違いによって、日本の歌舞伎を知らないブラジル人は歌舞伎役者がダンサーだと誤解する可能性がある。

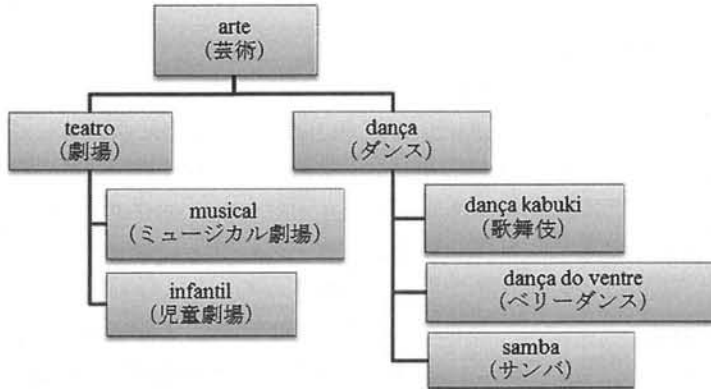


図10 “dança kabuki” (ブラジル)

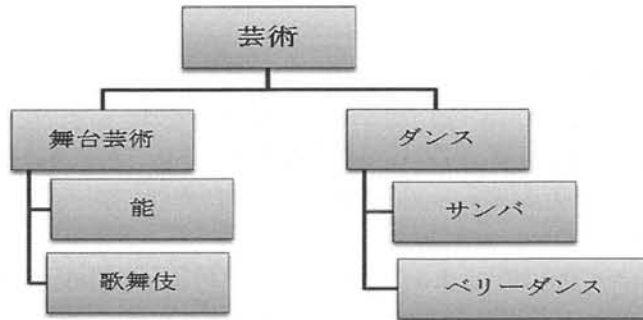


図11 「歌舞伎」と「ダンス」(日本)

5.2. 【toalha tenugui】(手ぬぐいタオル)

ポルトガル語の“toalha tenugui” [to'alo tɐnu'gui] という複合語の意味は「手ぬぐい地のタオル」である。個別に見るとポルトガル語要素の“toalha”が「タオル」で、日本語要素の“tenugui”が「手ぬぐい」である。日本語に訳すと「手ぬぐいタオル」となる。

ポルトガル語での“toalha”は素材よりその機能に注目される。図13によると、“toalha”は拭くものであり、その下位語にはサイズによって“toalha de mão” (ハンドタオル)、 “toalha de banho” (バスタオル)、 “toalha de rosto” (フェイスタオル) がある。そして、“toalha de mão” (ハンドタオル) の一種として“toalha tenugui” (手ぬぐいタオル) があ

る(図12)。ブラジルでは素材ではなく「拭く」という機能とサイズを重視するため、“toalha tenugui”(手ぬぐいタオル)と言う名称になったと考えられる。



図12 “toalha tenugui”(手ぬぐいタオル)⁷

一方、日本語の「手ぬぐい」と「タオル」は素材が異なる(図14)。特に日本では「手ぬぐい」や「タオル」はその素材に注目されることが多く、「木綿の手ぬぐい」や「パイル織」など素材によって区別されることが多い。従って、「手ぬぐい」と「タオル」は意味範疇が異なるので異範疇型混交形に分類した。なお、ポルトガル語では「タオル地」を“tecido felpudo”といい、“toalha”(タオル)は使われない。日本にも拭く機能に着目したタオルが使われる場合もある。それは「ペーパータオル」である。これについて、日本語母語話者に尋ねると、「小さい頃はなぜこれを『タオル』と言うのかわからなかった」と言っていた。これはやはり、「タオル」が素材に注目されているからだと考えられる。

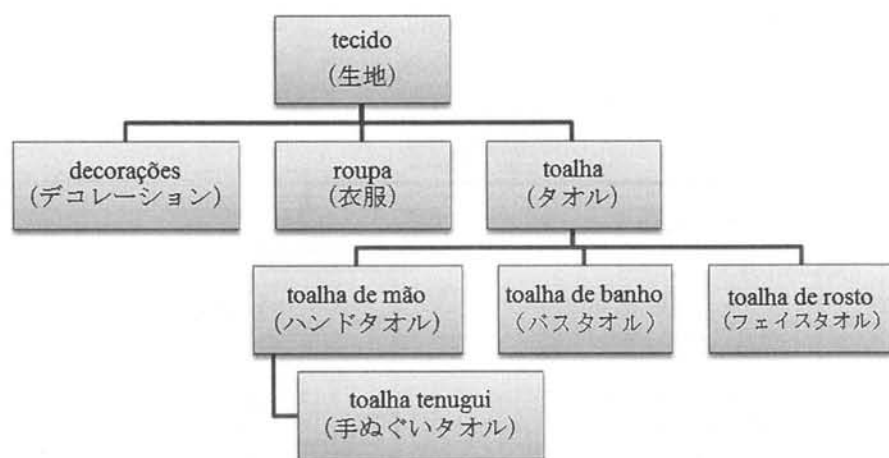


図13 “toalha tenugui”(ブラジル)

⁷ “toalha tenugui” 「Por que os japoneses amam Tenugui, as tradicionais toalhinhas de mão」 <https://www.japaoemfoco.com/por-que-os-japoneses-amam-tenugui-as-tradicionais-toalhinhas-de-mao/>
 閲覧 2022 年 02 月 03 日

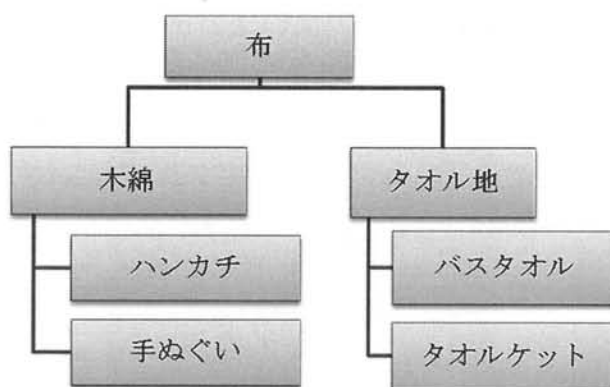


図14 「手ぬぐい」と「タオル」(日本)

5.3. 【boneca kokeshi】(こけし人形)

ポルトガル語の“boneca kokeshi” [bo'neka ko'keʃi] という複合語の意味は「こけし」である。個別に見ると、ポルトガル語要素の“boneca”が「人形」で、日本語要素の“kokeshi”が「こけし」である。日本語に訳すと「こけし人形」となる。

ポルトガル語では“kokeshi”は“boneca”(人形)の下位語である(図15)。“boneca”という上位語と“kokeshi”という下位語の組み合わせによって、複合語の“boneca kokeshi”が作られており、「こけし人形」という表現になるのである。「こけし人形」は日本語母語話者にとって少々不自然に感じるだろう。現在の日本では「こけし」は遊ぶものというより、棚に置く飾り物として用いられる。したがって、図16のように「こけし」は「飾り物」と「玩具」の下位語となる。つまり、日本語では「こけし」と「人形」は意味範疇が異なるので異範疇型混交形に分類した。

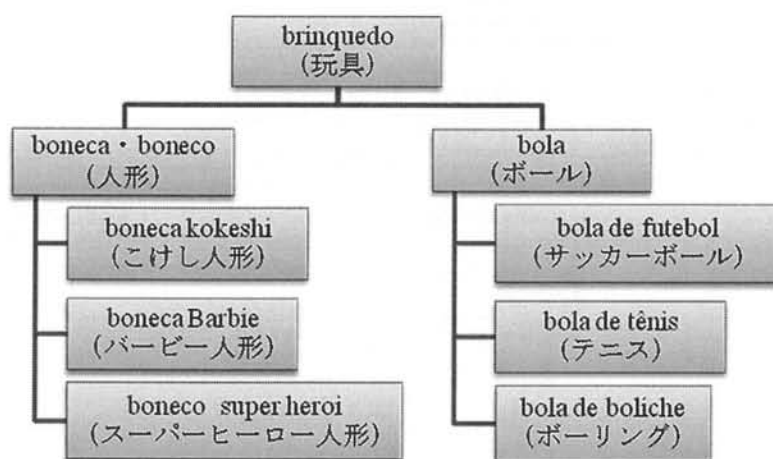


図15 “boneca kokeshi”(ブラジル)

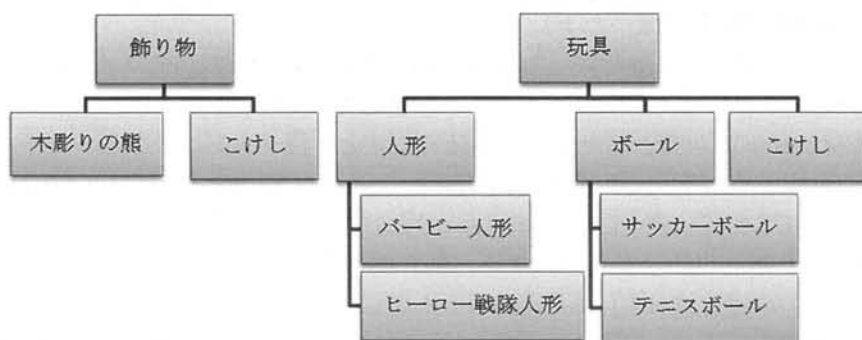


図16 「こけし」と「人形」(日本)

5.4. 【tempero furikake】(手ぬぐいタオル)

ポルトガル語の“tempero furikake” [tem'pɛro furi'kake] という複合語の意味は「ふりかけ」である。個別に見ると、ポルトガル語要素の“tempero”が「調味料」で、日本語要素の“furikake”が「ふりかけ」である。日本語に訳すと「調味料ふりかけ」となる。

ポルトガル語では“furikake”(ふりかけ)は“tempero”(調味料)の一種なので、“tempero”(調味料)と言う上位語と“furikake”(ふりかけ)という下位語の組み合わせによって、複合語の“tempero furikake”が作られている(図17)。一方、日本語で「ふりかけ」は「調味料」の下位語ではなく「副食」つまり主食と添える具の下位語で、海苔やなめ茸のようにご飯と一緒に食べるものである(図18)。したがって、日本語で「調味料」と「ふりかけ」は意味範疇が異なるので異範疇混交形に分類した。日本語では「調味料ふりかけ」とは言わないので、日本語母語話者には不自然に感じられるであろう。

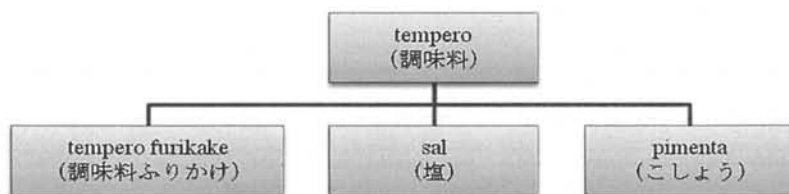


図17 “tempero furikake”(ブラジル)



図18 「ふりかけ」と「調味料」(日本)

5.5. 【cama tatame】（畳ベッド）

ポルトガル語の“cama tatame” [ˈkama taˈtami] という複合語の意味は「畳のように低いベッド」である。個別に見ると、ポルトガル語要素の“cama”が「ベッド」で、日本語要素の“tatame”が「畳」である。日本語に訳すと「畳ベッド」となる。ポルトガル語では“cama”（ベッド）という上位語に加え、“piso”（床）の下位語である“tatame”の組み合わせによって、複合語の“cama tatame”という複合語になる。

これまで日本語母語話者にとって不自然に感じられるものを挙げてきたが、この「畳ベッド」の場合は日本にも実際に存在している自然な表現である。なぜ日本語でもこの語構成が可能かという点、「畳」と「ベッド」が同等下位語(co-hyponyms)だからである(図19と20)。ポルトガル語と日本語の意味の位置関係が同様であるため、“cama tatame”も「畳ベッド」も自然な表現となるのである。なお、表現は同じでもブラジルで見かける“cama tatame”は日本のようにベッドの上に畳を敷く(図21)のではなく、畳や床の上で寝るマットレスを使用したベッドのことである(図22)。

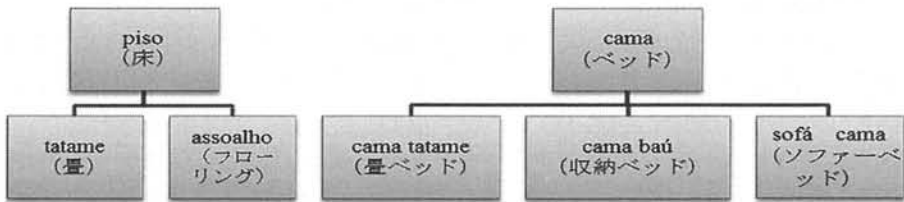


図19 “cama tatame” (ブラジル)



図20 「畳」と「ベッド」 (日本)



図21 畳ベッド (日本)⁸

⁸ 「たたみのこうひん」HP

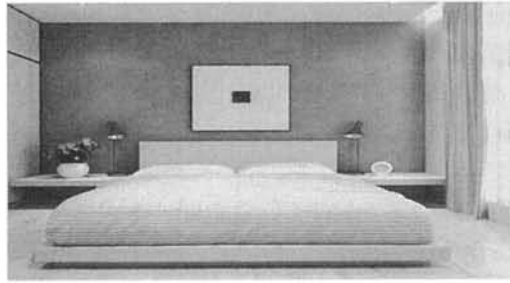


図22 “cama tatame” (ブラジル)⁹

5.6. 異範疇型混交形の結果

ポルトガル語要素の意味範疇と日本語要素の意味範疇が異なっている複合語、つまり異範疇型混交形は“dança kabuki”「歌舞伎ダンス」、「toalha tenugui」 「手ぬぐいタオル」、「boneca kokeshi」 「こけし人形」、「tempero furikake」 「調味料ふりかけ」、「cama tatame」 「畳ベッド」の5つであった。異範疇型混交形のように、ポルトガル語と日本語の意味範疇が異なるのは日本とブラジルにおける文化的背景や生活習慣の違いなどによるものだと考えられる。例えば、歌舞伎はブラジル人には「歌舞伎」の演技そのものより、踊り（動き）としての印象が強いので、“dança kabuki” 「歌舞伎ダンス」と言及するようになったと考えられる。また「ふりかけ」は無味のお白飯に掛けて味を付けることから調味料の一種であると認識して“tempero furikake” 「調味料ふりかけ」になったのだろう。

このように、元の意味を知らないブラジル人にとって、初めてみる日本語要素を身近にある事物と連携して組み合わせることで、ブラジル人にとって身近なものになっていったと考えられる。しかし、意味範疇が異なることで日本語母語話者とポルトガル語母語話者の間で誤解が生じ、その単語について議論し、同じ対象に対しても、異なる社会や習慣であるため、自分が正しいと思い込むと考えられる。

6. おわりに

以上のように、本稿では9つのポルトガル語とJOLからの組み合わせで生じた混交形を取り上げ、ポルトガル語要素と日本語要素の形式から上下関係と意味範疇の重なりや相違などによって、3つに分類し、分析を行った。以下がその結果である。

- A) 重言型混交形は、“molho tarê” (味付けたれ) の1つだけみられた。これは、日本語要素を維持して商品名として広くブラジルで定着していると考えられる。
- B) 包含型混交形は、本稿では“feijão azuki” (小豆まめ)、“carne wagyu” (和

https://www.kouhin.com/f/ranking?gclid=CjwKCAiA5t-OBhByEiwAhR-hm2kzFCzmb4hBGJf2T3I0b_2VsSGFWC9AdZH-EUQ82yBp380nSx5YmBoCh8kQAvD BwE#bed 閲覧 2022 年 01 月 04 日

⁹ “Decor: cama tatame” <http://voceprecisadecor.com.br/2016/11/decor-cama-tatame/> 閲覧 2022 年 01 月 04 日

牛肉)、“ganguê yakuza” (ヤクザギャング) の3 つについて分析を行った。包含型混交形の理由としては、ポルトガル語話者である聞き手に対して日本語要素である「小豆」「和牛」「ヤクザ」の対象物について言及する際に、日本語要素にポルトガル語要素を加えて複合語にした方が、より効果的に伝えられるからだと言われる。

- C) そして異範疇型混交は、“dança kabuki” (歌舞伎ダンス)、“toalha tenugui” (手ぬぐいタオル)、“boneca kokeshi” (こけし人形)、“tempero furikake” (調味料ふりかけ)、“cama tatame” (畳ベッド) の5 つであった。異範疇型混交形をみると、ポルトガル語と日本語の意味範疇が異なる理由は日本とブラジルにおける文化的背景や生活習慣などによるものだと考えられる。

本稿では複合語の混交形の 카테고리 と9 つの例を紹介した。今後もブラジルは日本文化との関わりが増え、日本語との接触も増えると考えられる。そのため、ポルトガル語における JOL に関して、新たに現れるポルトガル語要素と日本語要素の組み合わせから調査と分析の余地があると考えられる。今後は、日本語要素と他言語要素の複合語に関する研究にも貢献していきたいと考えている。

参考文献

- Carr, Elizabeth Ball (1972) *Da Kine Talk: From Pidgin to Standar English in Hawaii, Hawaii*. Chapter 8 Loanblends or Hybrid Compounds. The University Press of Hawaii; 1ST edition, pp. 111-112.
- Murphy, M. L and Koskela, A. (2015) *Key Terms in Semantics*, London.(翻訳今井邦彦・岡田聡宏・井門亮・松崎由貴)『意味論キータム事典』Hyperonym, hyponym, hyponymy (上位語、下位語、上下関係) 開拓社、pp.118-120.
- Richter and Agostinho (2017), *Adaptation of Japanese loanwords in Portuguese: a preliminary analysis*, Brazil. Loanword Phonology and Morphology and Phonological Acquisition of L2/L3, 3-13, pp. 127 - 149.
- 谷口、ナタリア愛香 (2020) 「ブラジルポルトガル語において意味変化を起こした日本語起源借用語」『日本語研究』、第41号、69 - 82。
- ロング、ダニエル・今村圭介(2020)「ヤップ語における日本語起源借用語の特徴」『日本語の研究』、第16巻2号、pp.152-166.
- ロング、ダニエル・高城隆一(2019)「マーシャル語辞典掲載の日本語起源借用語と若年層の使用傾向—意味と発音の変化に注目して—」『人文学報』、第515-7号、pp.29-49.

(たにぐち なたりあいか・東京都立大学大学院博士後期課程)